

靈廟

永井荷風

青空文庫

フランス
レニエエは、近世的都市の喧騒から逃れて路易大王が覇業の跡なるヴェルサイユの旧苑に
『噴水の都』 [La Cité des Eaux] と題する一巻の詩集を著した。その序詩の
末段に、

Qu'importe! ce n'est pas ta splendeur et ta gloire

Que visitent mes pas et que veulent mes yeux ;

Et je ne monte pas les marches de l'histoire.

[Au devant du Héros qui survit en tes Dieux.]

[Il suffit que tes eaux e'gales et sans fe'vte]

[Reposent dans leur ordre et tranquillite',]

[Sans que demeure rien en leur noble de'fuite]

[De ce qui fut jadis un spectacle enchante'.]

わが歩みヴェルサイユを訪とひわが眼まなこヴェルサイユを觀みんと欲するは
そが壯麗と光榮のためならず。

数知れぬ神となされて路ルイ易大王はなほも世にあり。然されば
われ何ぞ史伝の階段を極め昇るに及ばんや。

荒廢のいとも氣高き眺めの中には、

美しき昔のさまの影もあはれや、

遊あそ樂後を絶ちて唯だ変りなきその池いけみず水のみ、

昔いにしえの秩序と静寧うちいこの中に息いこひたるこそ嬉しけれ。

という句がある。

自分が頻しきりに芝山しばさん内の靈れい廟びやうを崇拜して止まないのも全くこの心に等しい。しかしレ

ニエエは既に世界の大詩人である。彼と我と、その思想その詩才においては、いうまでもなく天地雲泥の相違があろう。しかし同じく生れて詩人となるやその滅びたる芸術を回顧する美的感奮の真情に至つては、さして多くの差別があろうとも思われぬ。

否いな々。自分は彼れレニエエが「われはヴェルサイユの最後の噴泉そが噴泉の都おもての面に

慟哭するを聴く。」と歌った懐古の情の悲しさに比較すれば、自分が芝の靈廟に対して傾注する感激の底には、かえつて一層の痛切一層の悲惨が潜んでいなければならぬはずだと思ふのである。

ポンペイの古都は火山の灰の下にもなお昔のままなる姿を保存していた実例がある。仏蘭西の地層から切出した石材のヴェルサイユは火事と暴風と白蟻との災禍を恐るる必要なく、時間の無限中に今ある如く不朽に残されるであろう。けれども我が木造の靈廟は已にこの間も隣接する増上寺の焰に脅かされた。凡ての物を滅して行く恐しい「時間」の力に思い及ぶ時、この哀れなる朱と金箔と漆の宮殿は、その命の今日か明日かと危ぶまれる美しい姫君のやつれきつた面影にも等しいではないか。

そもそも最初自分がこの古蹟を眼にしたのは何年ほど前の事であつたらう。まだ小学校へも行かない時分ではなかつたか。桜のさく或日の午後小石川の家から父と母とに連れられてここまで来るには車の上ながらも非常に遠かつた。東京の中ではないような氣がした。綺麗な金ピカなお堂がいくつもあつて、その階の前で自分は浅草の観音さまのように鳩の群に餌を撒いてやつたが何故このお堂の近所には仲見世のような、賑やかでお土産を沢山買うような処がないのかと、むしろ不平であつた事なぞがおぼろに思い返される。

少年時代の幾年間は過ぎた。今から丁度十年ほど前、自分は木曜会の葵山渚、山湖山なぞという文学者と共に、やはり桜の花のさく或日の午後、あの五重の塔の下あたりの掛茶屋に休んだ。しかしその時には自分を始め誰一人靈廟を訪おうというものはなく、桜餅に洪茶を啜りながらの会話は如何にすれば、紅葉派全盛の文壇に対抗することが出来るだろうか。最少し具体的にいえばどうしたら『新小説』と『文芸倶楽部』の編輯者がわれわれの原稿を買うだろうかとの問題ばかりであった。われわれはあまりにトルストイの思想とゾラの法則を論ずるに忙しかった。それから三年ならずして意外なる運命は自分の身を遠い処へ運び去って、また四年五年の月日は過ぎた。再び帰って来たとき時勢は如何に著しく昨日と今日との間を隔離させていたであろう。

久しく別れた人たちに会おうとて、自分は高輪なる小波先生の文学会に赴くため始めて市中の電車に乗った。夕靄の中に暮れて行く外濠の景色を見尽して、内幸町から別の電車に乗換えた後も絶えず窓の外に眼を注いでいた。特徴のないしかも乱雑な人家つづきの街が突然尽きて、あたりが真暗になったかと思うと、自分は直様窓の外に縦横に入り乱れて立っている太い樹木を見た。蒼白いガスの灯と澄み渡った夜の空との光の中に、樹木の幹は如何に勢よく、屈曲自在なる太い線の美を誇っていたであろう。

アメリカの曠野に立つ檜フランスの街道に並ぶ白楊樹地中海の岸辺に見られる橄欖の樹が、それぞれの姿によってそれぞれの国土に特種の風景美を与えているように、これは世界の人が広重の名所絵においてのみ見知っている常磐木の松である。

自分は三門前と呼ぶ車掌の声と共に電車を降りた。そして前後左右に匍匐する松の幹の間に立つてその姿に見とれた時、幾年間全く忘れ果ててしまった靈廟の屋根と門とに心付いたのである。しかしその折にはまだ裏手の通用門から拝観の手続きをなすべき案内をも知らなかつたので、自分は秋の夜の静寂の中に暈々として波の如く次第に奥深く重なつて行くその屋根と、海のように平かな敷地の片隅に立ち並ぶ石燈籠の影をば、廻らされた柵の間から恐る恐る覗いたばかりであつた。

翌日自分は昨夜降りた三門前で再び電車を降りて、先ず順次に一番端れなる七代將軍の靈廟から、中央にある六代將軍、最後に増上寺を隔てて東照宮に隣りする二代將軍の靈廟を参拝したのである。この事は已に『冷笑』と題する小説中紅雨という人物を借りて自分はつぶさにこれを記述した事がある。

「紅雨の最も感動したのは、かの説明者が一々に勿体つける欄間の彫刻や襖の絵画や金箔の張天井の如き部分的の装飾ではなくて、靈廟と名付けられた建築とそ

れを廻る平地全体の構造配置の法式であつた。

先ず彎曲した屋根を戴き、裝飾の多い扉の左右に威嚇的の偶像を安置した門を這入ると真直な敷石道が第二の門の階段に達している。敷石道の左右は驚くほど平かであつて、珠の如く滑かな粒の揃つた小石を敷き、正方形に玉垣を以て限られた隅々に銅の燈籠を数えきれぬほど整列させてある。第二の門内に這入ると地盤が一段高くしてあつて第一と同じ形式の唯だ少しく狭い平地は直様靈廟を戴く更に高い第三の乃ち最後の区劃に接しているのである。此処にはそれを廻る玉垣の内側が他のものと違つて、悉く廻廊の体をなし、靈廟の方から見下すとその間に鈞燈籠を下げた漆塗の柱の数がいかにも肅々として整列している。靈廟そのものもまた平地と等しくその床に二段の高低がつけてあるので、もしこれを第三の門際よりして望んだならば、内殿の深さは周囲の裝飾と薄暗い光線のために測り知るべくもない。

この建築全体の法式はつまり人間の有する敬虔崇拜の感情を出来得べき限りの最高度まで興奮させようと企てたものでしかも立派にその目的に成功した大なる美術的傑作品である。

紅雨は生涯忘れない美的感激の極度を経験したと信ずる巴里の有名なる建築物に対し

た時の心持に思い較べて、芝の靈廟はそれに優るとも決して劣らぬ感激を与えてくれた事を感じた。そればかりでなく、彼はまた曲線的なるゴチック式の建築が能くかの民族の性質を伝えるように、この方形的なる靈廟の構造と濃厚なる彩色とは甚だよく東洋固有の寂しく、驕慢に、隔離した貴族思想を説明してくれる事を喜んだ。なおそれのみに止まらず、紅雨は門と玉垣によつて作られた二段三段の区劃を眺めてメエテルリンクやレニエエなどが宮殿の数ある柱や扉によつて用いたような象徴芸術の真髓を会得したようにも感じた。」

實際この二世紀以前の建築は自分に対して明治と称する過渡期の芸術家に対して、数え尽されぬほどいかに有益なる教訓と意外なる驚嘆の情とを与えてくれたか分らない。

自分はもしかの形式美の詩人テオフィル・ゴチエが凡そ美しき宇宙の現象にして文辞を以ていい現わせないものはないといったように、詞藻の豊富に対して驚くべき自信を持つていたなら、自分は余す処なく靈廟の柱や扉の彫刻と天井や襖の絵画の一ツ一ツを茲に写生し、そしてまた七代と六代將軍と互に相隣りせる靈廟の構造の全く同一でありながら、単に裝飾の細節において相違する点をもつぶさに書き分けていまだ靈廟を見ない人に向つて誇り顔にこれを紹介したことであろう。

しかし自分の画版はあまりに狭く自分の目の前にひろがっている世界はあまりに莊重美麗である。自分はただ断片的なる感想を断片的に記述する事を以て足れりとせねばならぬ。

われわれ過渡期の芸術家が一度びこの靈廟の内部に進入つて感ずるのは、玉垣の外なる明治時代の乱雑と玉垣の内なる秩序の世界の相違である。先ず案内の僧侶に導かれるまま、手摺れた古い漆塗りの廻廊を過ぎ、階段を後にして拝殿の堅い畳の上に乗って、正面の奥遙には、金光燦爛たる神壇、近く前方の右と左には金地に唐獅子の壁画、四方の欄間には百種百様の花鳥と波浪の彫刻を望み、金箔の円柱に支えられた網代形の高い天井を仰ぎ見よ。そして広大なるこの別天地の幽邃なる光線と暗然たる色彩と冷静なる空気とに何か知ら心の奥深く、騒しい他の場所には決して味われぬ或る感情を誘い出される時、この靈廟の来歴を説明する僧侶のあたかも読経するような低い無表情の声を聞け。——昔は十萬石以上の大名がこの殿上に居並び、十萬石以下の大名は外なる廻廊に参列して礼拝の式をなした。かく説明する僧侶の音声は（言語の意味からではない。）如何によく過去の時代の壯麗なる式場の光景を眼前に髣髴たらしめるであらうか。

自分は嚴かなる唐獅子の壁画に添うて、幾個となく並べられた古い経机を見ると共

に、金欄きんらんの袈裟けさをかがやかす僧侶の列をありありと目に浮うかべる。拜殿の畳の上に据え置かれた太鼓と鐘と鼓とからは宗教的音楽の重々しく響ひび出でるのを聞き得るようにも思う。また振返つて階段の下なる敷石を隔てて網目のように透すき彫ぼりのしてある朱塗の玉垣と整列した柱の形を望めば、ここに居並んだ諸国の大名の威儀ある服装と、秀麗なる貴族的容貌とを想像する。そして自分は比較する気もなく、不体裁ふていさいなる洋服を着た貴族院議員が日比谷の議場に集合する光景に思い至らねばならぬ。

これにつけてもわれわれはかのアングロサクソン人種もたらが齋いたした散文的実利的な文明もとづに基いて、没趣味なる薩長人の経営した明治の新時代に対して、幾度いくたび幾年間、時勢の変遷と称する余儀ない事情を繰返し繰返して嘆いていなければならぬのであろう。

われわれは已すでに今日となつては、いかに美しいからとて、昔の夢をそのままわれらの目の前に呼返そうと思つてはおらぬ。しかしながら文学美術工芸よりして日常一般の風俗流行に至るまで、新しき時代が促うながしつくりしめる凡すべてのものが過去に比較して劣るとも優つておらぬかぎり、われわれは丁度かの沈滞せる英国の画界を覚醒したロセツチ一派の如く、理想の目標を遠い過去に求める必要があるが、ありはせまいか。

自分は次第に激しく、自分の生きつつある時代に対して絶望と憤怒ふんぬとを感ずるに従つて、

ますます深く松の木蔭こかげに声もなく居眠っている過去の殿堂を崇拜せねばならぬ。

欄間や柱の彫刻、天井や壁の絵画を一つ一つに眺めよう。

自分はここにわれらの祖先が数限りなく創造した東洋固有の芸術に逢着する。松、竹、梅、桜、蓮、牡丹ぼたんの如き植物と、鶴、亀、鳩、獅子、犬、象、竜の如き動物と、渦巻く雲、逆巻く波の如き自然の現象とは、いずれも一種不思議な意匠によって勇ましくも写実の規定から超越して巧みに模様化せられ、理想化せられてある。われわれは今こんにち日春うるわの日の麗しい自然美を歌おうとするに、どういう訳で殊ことさら更さらダリヤと堇すみれの花とを手折たおつて来なければならなかったであろう。

朱塗の玉垣のほとりには敷石に添うて幾株の松や梅が植えられてある。これらの植物の曲つて地に垂れたその枝振り、岩のようにごつごつして苔に蔽われた古い幹との形は、日本画にのみ見出される線の筆力を想像せしめる。並んだ石燈籠の蔭や敷石の上に来るでつくりばな造花つくはなとしか見えぬ椿の花の落ち散っている有様は、極めて写実的ならざる光琳派こうりんはの色彩を思わしめる。互いに異なる風土からは互いに異なる芸術が発生するのは当然の事であろう。そして、この風土特種とくしゆの感情を遺憾なく發揮する処に、凡てすべの大なる芸術の尽きない生命が含まれるのではあるまいか。

雪の降る最中、自分はいつものように靈廟を訪ねた事があった。屋根に積った真白な雪の間から、軒裏のきうらを飾る彫刻の色彩の驚くばかり美しく浮上っていた事と、漆塗の黒い門の扉うしろを後にして落花のように柔かく雪の降つて来る有様と、それらは一面の絵として、自分には如何なる外国の傑作品をも聯想れんそうせしめない、全く特種の美しい空想を湧起ゆうきせしめた事を記憶している。強しいて何かの聯想を思い出させれば、やはり名所の雪を描いた古い錦絵か、然らずば、芝居の舞台で見る「吉野山」か「水滸伝」の如き場面であろう。けれども、それらの錦絵も芝居の書割かきわりも決して完全にこの珍らしい貴重なる東洋固有の風景を写しているとは思えない。

寒かんげつ月の隈なく照り輝いた風のない静な晩、その蒼白い光と澄み渡る深い空の色とが、何というわけなく、われらの国土にノスタルジックな南方的情趣を帯びさせる夜よる、自分は公園の裏手なる池のほとりから、深い樹木に蔽われた丘の上に攀よじ登って、二代將軍の墳墓に近い朱塗の橋を渡り、その辺へんの小高い処から、木の根に腰をかけて、目の下一面に、二代將軍の靈廟全体を見下みおろした事がある。

底光りのする空を縫った老樹の梢こすえには折々梟ふくろが啼ないている。月の光は幾重いくえにも重かさなつた靈廟の屋根を銀盤のように、その軒裏の彩色を不知火しらぬいのように輝かがやかしていた。屋根を越しては、

廟の前なる平地が湖水の面おもてのように何ともいえぬほど平かに静に見えた。二重にも三重にも建て廻めぐらされた正方形なる玉垣の姿と、並んだ石燈籠の直立した形と左右に相對して立つ御手洗みたらしの石の柱の整列とは、いづれも幽暗なる月の光の中に、浮立つばかりその輪郭を鋭くさせていたので、もし誇張していえば、自分は凡て目に見る線のシンメトリーからは一いつしよ所いっしょになって、或る音響が発するようにも思うのであった。しかしこの音楽はワグネルの組織ともドビュツシイの法式とも全く異つてその土地に生れたものの心にのみ、その土地の形象が秘密に伝える特種とくしゆの芸術げいじゆつの囁ささやきともいうべきであつたらう。

已に半世紀近き以前一種の政治的革命が東叡山とうえいざんの大伽藍だいがらんを灰燼かいじんとなしてしまつた。それ以来新しくこの都に建設せられた新しい文明は、汽車と電車と製造場せいぞうばを造つた代り、建築と称する大なる国民的芸術を全く滅してしまつた。そして一刻一刻、時間の進むごとに、われらの祖国をしてアングロサクソン人種の殖民地であるような外観を呈せしめる。古くして美しきものは見る見る滅びて行き新しくして好きものはいまだその芽を吹くに至らない。丁度焼跡の荒地あれちに建つ仮小屋の間を彷徨さまようような、明治の都市の一隅ひとしにおいて、われわれがただ僅か、壯麗なる過去の面影に接し得るのは、この靈廟、この廢址はいしばかりではないか。

過去を重んぜよ。過去は常に未来を生む神秘の泉である。迷える現在の道を照す燈火である。われらをして、まずこの神聖なる過去の霊場より、不体裁なる種々の記念碑、醜悪なる銅像等凡て新しき時代が建設したる劣等にして不真面目なる美術を駆逐し、そしてわれらをして永久に祖先の残した偉大なる芸術にのみ恍惚たらしめよ。自分は断言する。われらの将来はわれらの過去を除いて何処に頼るべき途がある。

明治四十三年六月

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一」岩波書店

1981（昭和56）年11月17日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霊廟

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>